

寓意歌としての三二三九番歌： 万葉集卷十三と記紀歌謡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉住, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7001

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



寓意歌としての三三三九番歌

——万葉集卷十三と記紀歌謡——

倉 住 薫

はじめに

万葉集卷十三・三三三九番歌は、記紀歌謡の表現形式を用い、七・八音の不定型句の末尾を持つ「近江の海」の情景を詠う歌である。⁽¹⁾

近江の海 泊まり八十あり 八十島の 島の崎々 あり立てる 花橘を 上枝に もち引き掛け 中つ枝に いか
るが掛け 下枝に ひめを掛け 汝が母を 取らくを知らに 汝が父を 取らくを知らに いそばひ居るよ いか
かとひめと

(卷十三・三三三九)

右の一首

「近江の海」には、多くの港があり岬には「花橘」が茂る。その「花橘」の上の枝にとりもちを仕掛け、中段の枝には

「いかるが」を、下段には「ひめ」を止まらせる。囀となったその鳥たちは、母と父が捕られることも知らずにふざけ合っているという内容の歌である。多くの港や岬がある「近江の海」（琵琶湖）の雄大な情景と、「花橘」に仕掛けられた罫、そして、自分たちが母父を捕えるための罠であることに気づかず遊ぶ「いかるが」と「ひめ」とが詠まれ、寓意のある歌としても解釈されている。

初夏に花を咲かせる「橘」と冬鳥である「いかるが」「ひめ」という異なる季節の景物によって「近江の海」の情景が描かれ、鳥たちの遊ぶ愛らしい姿が悲劇を導くことを予測させるように詠まれてもいる。季節のズレと暗示的な歌い方が、三三三九番歌を解釈する上で重要な視点となる。

本論では、罫が仕掛けられた「花橘」と囀となった「いかるが」「ひめ」の検討を行い、三三三九番歌の寓意の内実を明らかにすることで、卷十三と古事記日本書紀の世界とのつながりについて考えてみたい。

一 「花橘」

三三三九番歌に詠まれた「花橘」は、橘の花のことである。「橘」とは、コミカンと称される紀州みかん、あるいはニッポンタチバナ（ヤマトタチバナ）のこととされる。有力とされるニッポンタチバナは、日本固有のカンキツであり、二〜四メートルほどになる常緑小高木で、五六月に香りの高い白い花を咲かせる。直径三センチメートルほどの滑らかな実は酸味が強く食用にはむかない^①。万葉集の歌においても、実ではなく花が詠まれることが多い^②。

1 我がやどの花橘は散りにけり悔しき時に逢へる君かも

（卷十・一九六九 作者未詳）

2 五月山花橘にほととぎす隠らふ時に逢へる君かも

（卷十・一九八〇 作者未詳）

1は、卷十「夏の雑歌」の「花を詠む」に収載された、「花橘」が散つてしまつてから久々に訪れた男性へ恨み言を言う女性の歌であり、2は「夏の相聞」の「鳥に寄する」に収載された、五月の山での人目を忍んだ逢瀬を「花橘」に籠る「ほととぎす」と重ね合わせて詠んだ歌である。「花橘」は開花時期である夏の部に多く収載され、「ほととぎす」や「五月」の語を伴うことから、初夏の季節を代表する花として認識されていたことが分かる。⁽⁴⁾曾倉岑担当『全注』は「花橘」を「橘そのものの歌語」として理解するが、万葉集の用例から、花の咲いた「橘」と言えよう。万葉集において「橘」は七一首、そのうち「花橘」は三三例あり、花の様相が詠み込まれている。⁽⁵⁾

3 我がやど^わの花橘^{はなたちばな}は散り過ぎて玉^{たま}に貫^ぬくべく実^みになり^いにけり

(卷八・一四八九 大伴家持)

4 君^いが家の花橘^{はなたちばな}は成りにけり花なる時に逢^あはましものを

(卷八・一四九二 遊行女婦)

3の歌は、題詞に「大伴家持が橘の花を惜しむ歌一首」とあり、「橘」の「花」が散り「玉に貫く」ことができるほどの「実」となったことを詠み、4は「花橘」が実になる前の「花」の時期に会いたかつたという思いを詠む。実ではなく「花」が求められていることから「花橘」は「花」が重要なものとして認識されていることが理解できよう。ただ「花橘」を「玉に貫く」ことを詠む例が他にもあることは注目すべきだろう。⁽⁶⁾

5 五月^{さつき}の花橘^{はなたちばな}を君^{きみ}がため玉^{たま}にこそ貫^ぬけ散らまく惜^おし^もみ

(卷八・一五〇二 坂上郎女)

6 片^{かた}搥^{たよ}りに糸^{いと}をそ我が搥^ある我が背^せ子が花橘^{はなたちばな}を貫^ぬかむと思^{おも}ひて

(卷十・一九八七 作者未詳)

7 我がやど^わの花橘^{はなたちばな}を花^{はな}ごめに玉^{たま}にそ我が貫^ぬく待^{まち}たば苦^{くる}しみ

(卷十七・三九九八 石川水道「伝誦するは、主人大伴宿禰池主なりと云爾」)

四

5は「花橋」が散ってしまうのを惜しんであなたのために「玉」に通したことを歌う。6は「夏の相聞」の「花に寄する」に収載された歌で、相手へ届ける「花橋」の玉を貫くための糸を繕うことと女性の一筋な恋心を詠んでいる。7は、待ち遠しいあまりに「花橋」の花ごと「玉」に貫くことを詠んでいる。「花橋」を「玉に貫く」ことは、五月の薬玉ともされるが、実体は不明である。^⑦7では「花」ごと玉にし、6では貫く糸が詠まれることから、花卉あるいは花房を糸でつないで「玉」としていたことが分かる。ところで、5のように「花橋」が「散る」ことを詠む歌も多くみられる。^⑧

8 我がやどの花橋をほととぎす来鳴きとよめて本に散らしつ

(卷八・一四九三 大伴村上)

8は「花橋」を「ほととぎす」が鳴いて根本に散らしてしまったことを歌っている。2で確認したように「花橋」と「ほととぎす」とは時節の取り合わせだが、「ほととぎす」は「花橋」を散らすものとしても捉えられていた。

このように、「花橋」の例を検討してみると、五六月頃に白く小さな花を咲かせる「花橋」は、その開花が待ち望まれ、花が咲き散るさまが、初夏の景として詠まれていることがわかる。^⑨

同じく三三三九番歌においても、常緑の葉に小さな白い花が咲き誇る「花橋」のある「近江の海」の初夏の景色が詠まれていると理解できる。

二 「いかるが」と「ひめ」

次に、母と父を捉えるための囀として仕掛けられた「いかるが」と「ひめ」について考察していきたい。

「いかるが」は、スズメ目アトリ科の全長二十三センチメートルほどの黄色のくちばしを持つ鳥類で、木の実を好んで食べ「まめまわし」とも呼ばれる。繁殖期の五〜七月にはつがいとなるが、非繁殖期には群れを形成し山林で生活する。「ひめ」は同じくスズメ目アトリ科、全長は十八センチメートルほど。北海道で繁殖し、秋に本州へ渡来し雑木林などで生活する。「いかるが」と「ひめ」とは冬には生活圏が重なるため、『代匠記』初稿本が「いかるがかしめふたつの鳥、其かたちよく似て、つれたちありくなり」と指摘するように、実際に同じ場所で姿を捉えることができる。万葉集においても、以下の作品の左注で「いかるが」と「ひめ」とが登場する。

讃岐国の安益郡に幸せる時に、軍王、山を見て作る歌

霞立つ 長き春日の 暮れにける わづきも知らず むら肝の 心を痛み ぬえこ鳥 うらなけ居れば 玉だすき
かけの宜しく 遠つ神 我が大君の 行幸の 山越す風の ひとり居る 我が衣手に 朝夕に かへらひぬれば
ますらをと 思へる我も 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の 海人娘子らが 焼く塩の
思ひそ燃ゆ 我が下心

(卷一・五)

反歌

山越しの風を時じみ寝る夜おちず家なる妹をかけて思ひつ

(一六)

右、日本書紀に檢すに、讃岐国に幸ししことなし。また軍王も未詳なり。ただし、山上憶良大夫の類聚

歌林に曰く、「記に曰く、『天皇の十二年己亥の冬十二月、己巳の朔の壬午に、伊予の温湯の宮に幸す云々』といふ。一書に、『この時に、宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に、斑鳩と比米との二つの鳥大く集けり。時に勅して、多く稲穂を掛けてこれに養はしめたまふ。仍りて作る歌云々』といふ」といふ。けだし、ここより便ち幸せるか。

題詞によると、舒明天皇が讃岐国の安益郡に行幸した際に軍王が山を見て作った歌である。舒明天皇の讃岐国行幸は日本書紀に記載がなく、類聚歌林によって、舒明天皇十一年十二月己巳（十四日）の伊予の温湯への行幸時に讃岐にも立ち寄った際に歌われたものと、左注は指摘している。また、類聚歌林引用の「一書」に「いかるが」と「ひめ」とが登場する。舒明天皇の伊予の温湯行幸時の宮に「いかるが」と「ひめ」とがたくさん集まる二つの樹があり、その樹に稲穂を掛けて鳥たちを飼うように命じ、歌が詠まれたと類聚歌林は伝える。「いかるが」と「ひめ」とは、軍王の歌の契機となったのである。この軍王の歌は、故郷から「山」を越えて吹き降ろす冬の「風」が「我が衣手」を「朝夕」に吹き返し「帰れ」とひっきりなしに言われているかのようで、ここ「網の浦」の「海人娘子」たちが「焼く塩」のように私の心のうちを焦がすのだ、という歌である。軍王は「いかるが」と「ひめ」とが多く集まったことよって望郷の歌を詠んだ。つまり「いかるが」と「ひめ」とは、旅において望郷の念を生じさせる都の冬の景として認識されていたと言えるのである。¹⁰⁾

このように「いかるが」と「ひめ」とが対のモチーフとなり、都の冬の景として捉えられていたことが確認できる。「近江の海」の情景を歌う当該の三三三九番歌においても、旅愁の契機となった景と考えるべきであろう。すなわち、この歌は「近江の海」に見た「いかるが」と「ひめ」から、都を想起した旅の歌の発想をもつのである。

三 叙景と寓意

第一章では「花橘」が初夏の美しい情景を象徴すること、第二章では「いかるが」と「ひめ」とが都の冬鳥として認識されていたことを指摘した。すなわち当該の三三三九番歌においては、現実には同時に見ることのない「近江の海」の情景を歌っていることになる。それは、三三三九番歌が、眼前の情景をそのまま歌う叙景歌ではないと示すのである。

叙景歌か否かは、三三三九番歌に寓意を認めるかどうかの問題と関わってくる。早くは『代匠記』初稿本が「此哥はいかるかしめか、ともに父母をもちにて取もしらてあそふは、智もなくて、おさなきとたとふること有てもよめるにや」、さらに精撰本では「ハカナキ事ト憐レヒテヨメルナルヘシ」と、「両親を捕えるための囹となったことも知らずに遊ぶ、知恵もなく幼い者たちを憐れむ寓意のある歌と捉えている。続いて『万葉考』は、武埴安彦の反乱を暗示した日本書紀十八番歌謡に等しい「たとへ哥」とし、その諷刺の内容を「近江の海をしもいへれば、大友皇子皇太子をしりぞけ奉つらむはかりごとの有ときのたとへごとか」と、壬申の乱との関連で説き、『略解』も同様に理解した。さらに『古義』は、

中山巖水云、こは天武天皇の、吉野に入座した後、大友皇子の、天武天皇を襲ひ賜はむとて、しのび／＼に軍の設などせさせ賜ふほど、高市皇子、大津皇子は、其事を知らせ賜はずて、何心も無ておはすを見て、天武天皇に、志ある臣のよみて、二人の皇子等に、諷し奉りたる歌なるべし、といへり、信にさもありなむ

と、大海人皇子であった天武天皇の吉野入り後、大友皇子が襲撃を計画していることに気がついていない高市皇子・大津皇子（天武天皇の皇子たち）に臣下が諷諭した歌と理解している⁽¹⁾。また、寓意があるとしながらも『全註釈』が「どのよ

うにも事實に當てられるので、實際にイカルガとヒメとを何人にたとえているかは、決定しがたい。材料として、花橋に媒鳥を懸けている風景を捕えて、巧みに寓意を盛りあげている。上品な諷諭の作である」とするように、寓意の内実を明らかにはしていないものもある。⁽¹²⁾

社会的な事件を諷刺する「童謡^{わらわた}」としての寓意説がある一方、宣長は「聞エタルトホリ也」(「万葉集十三之巻疑問」)

とし、その寓意を認めない。⁽¹³⁾さらに松岡『論究』は『古義』の中山巖水説を挙げ「聊か穿ち過ぎで、湖辺航過に際し、眼に映じた光景を叙したものと見ても、間然する所のない芸術作品である」とし、窪田『評釈』は「奈良朝の知識人の、近江の海の遊覧者となつての感懐とみるべきであらう」とする。『私注』も「その困の心なげに、遊びたはむれるさまに興をおこしての民謡であらう。……別に寓意を考へるには及ばぬ歌で、たのしみ謡ふ民謡とだけみれば足りるものであらう」と、『全集』は「琵琶湖畔のわらべ歌」説を唱える。つまり、これらの諸注釈書は、奈良朝官人の詠、あるいは現地で伝誦された叙景歌とみるのだが、第二章で述べたように、三三三九番歌は旅における歌であり、現地の民謡・童謡ではない。これらの非寓意説は、民謡と取るか都人によつて歌われた歌と見るかで異なるが「近江の海」遊覧の叙景歌とすることでは一致している。曾倉岑担当『全注』は、

寓意説を直接否定することは難しいし、当事者・関係者でない以上、寓された意を正確に知ることは不可能である。できる限り、寓意説を排したところから考えるべきであらう。

と寓意説から歌を切り離れた上で、三三三九番歌が「近江の海」の岬にある情景を詠うことを根拠として「湖上を船で行く人」によつて詠まれたとする。

だが、非寓意説にも問題点がある。一つは「花橋」と「いかるが」「ひめ」との季節のズレである。窪田『評釈』は

「花橋」を「こは花を心においての橋である」とし、「いかるが」と「ひめ」とが渡ってくる「秋の季節」に「船に乗って、近江の湖の岸沿ひを周航」した「奈良朝の知識人」の歌とする。また『私注』も「花橋」を「修辭たるにすぎない」とし「早春、又は秋冬」の琵琶湖の情景を詠った「近江の民謡」と理解している。つまり「いかるが」「ひめ」がともに生活する季節の「近江の海」の情景を詠んだのであり、「花橋」は実景ではないとするのだが、情景の一方のみを事実として捉えるのは無理があるのではないだろうか。花咲く「橋」の枝に囿として仕掛けられた「いかるが」と「ひめ」とが遊ぶ姿すべてが、「近江の海」の情景を描きだす表現なのである。「花橋」のみが幻想の景となるのであれば、その景が選ばれた意義も問われなければならない。

さらに、三三三九番歌が遊覧者によって詠まれた叙景歌だったとしても、あるいはその地に伝わる民謡であったとしても、その歌に寓意がないことにはならない。問われるべきは、三三三九番歌が寓意を読み取らせる表現や構造をもっていることではないだろうか。

四 日本書紀歌謡とのつながり

寓意説の論拠となってきたのが、日本書紀の崇神天皇条十八番歌謡と「童謡」と記された天智天皇条一二六―一二八番歌謡である。卷十三には、記紀との関連が指摘される歌も多い。本章では、寓意説の論拠となってきた日本書紀の歌謡について検討し、卷十三と記紀の世界との関連から、三三三九番歌がどのような発想をもつ歌であるのかを考察したい。

以下が、崇神天皇条の該当場面である。⁽¹⁴⁾

壬子に、大彦命、和珥坂の上に到る。時に少女有り、歌して曰く、一に云はく、大彦命、山背の平坂に到る。時に、

道の側に童女あり、歌して曰はく、といふ。

御間城入彦はや己が命を弑せむと窺まく知らに 姫遊びすも 一に云はく、大基門より窺ひて 殺さむとす
らくを 知らに 姫遊びすも (十八)

といふ。是に、大彦命異しびて、童女に問ひて曰く、「汝が言ひつるは何の辞ぞ」といふ。対へて曰く、「言はず。唯歌ひつるのみ」といふ。乃ち重ねて先の歌を詠ひ、忽に見えずなりぬ。大彦乃ち還りて具に状を以ちて奏す。是に天皇の姑倭迹迹日百襲姫命、聡明く叡智しくましまして、能く未然を識りたまへり。乃ち其の歌の怪を知りまして、天皇に言したまはく、「是、武埴安彦が謀、反けむとする表ならむ。吾が聞かく、武埴安彦が妻吾田媛、密に來りて、倭の香山の土を取り、領中の頭に裹みて、祈ひて曰さく、「是、倭國の物実」とまをし、則ち反ると。物実、此には望能志呂といふ。是を以ちて、事有らむと知りぬ。早く凶るに非ずは、必ず後れなむ」とまをしたまふ。

大彦命が和珥坂で少女に出会い、その少女は十八番歌謡を歌う。不思議に思つた大彦命は童女に尋ねるが、童女は「ただ歌つただけだ」と答えた。仔細を受けて、崇神天皇の姑であり聡明な倭迹迹日百襲姫命は、吾田媛（武埴安彦の妻）が密かに香具山の土を取り「倭國の物実」であると言つたことから、歌の意味を、武埴安彦の謀反の予兆として説いた場面である。突然現れた「少女」は歌を歌い、大彦命の不審にも「唯歌ひつるのみ」と言い、歌の意味を説明することもなく忽然と姿を消す。「少女」の歌は、大彦命が「異し」んだように、「御間城入彦」（崇神天皇）の命が奪われそうになつてゐることを示しているが、反乱の首謀者や方法など具体的に実態を示すことはない。謀反が起こることを知らないまま、崇神天皇は「姫遊び」をしていることを、まるで揶揄するかのよう歌う。この「姫遊びすも」という詞章は、類似の歌謡である古事記二三番歌謡にはなく、どのようなことを示すのか判然としないが、早くに『古事記伝』が「媛遊とは、天皇の美女を集へて、宴などし給ふを云るなるべし」とし、多くの支持を得ている。つまり、女性と戯れている間に、謀反

が起きることを歌によって示唆し、事件を悟らせるということだ。日本書紀の十八番歌謡は「童謡」とは記載されないが、今後の展開と現状とを対比することで暗示する、という歌の構造として「童謡」的な要素を持っている。¹⁶「童謡」とは『春秋左史伝』以下の中国歴史書に倣ったもので「何らかの社会的事件の前兆の歌か、批評の歌」とされる。¹⁷

「童謡」と記載のない日本書紀の十八番歌謡と万葉集の三三三九番歌は、以下のように、同じ構造をもつ歌である。

〈予見〉

「知らに」

〈現状〉

日本書紀 十八番歌謡 … 己が命を 弑せむと 窃まく

知らに

姫遊びすも

万葉集 三三三九番歌 … 汝が母を 取らくを

知らに

汝が父を 取らくを

知らに

いそばひ居るよ いかるがとひめと

両者は、「知らに」という言葉を挟む形式で〈予見〉と〈現状〉とを対置し、今後の成り行きを暗示するのである。つまり、「童謡」と記載がなくとも、悲劇の予兆を語る歌謡の型があるということだ。三三三九番歌は、自分の母父が捕らえられることも知らないまま「いかるが」「ひめ」とが「いそばひ居る」ことが歌われている。「いそばひ」は、ふざけるの意の「そばふ」に接頭語「い」が付いた語と考えられている。¹⁸日本書紀と三三三九番歌の〈予見〉はともに命が奪われることであり、〈現状〉は、天皇が女性と戯れることを示す「姫遊び」と、「いかるが」と「ひめ」との戯れであり、こちらも共通している。やはり、三三三九番歌も、今後の悲劇を暗示する歌・寓意の歌としての機能を持っているといえよう。この〈寓意〉には、何を含んでいるのだろうか。以下、従来関連が指摘されてきた、壬申の乱の予兆について検討していきたい。以下が、日本書紀の天智天皇条の歌謡である。

十二月の癸亥の朔にして乙丑に、天皇、近江宮に崩りましぬ。

癸酉に、新宮に殯す。時に、童謡ありて曰く、

み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 鳥傍も良き え苦しゑ 水葱の下 芹の下 吾は苦しゑ 其の一 (一一二六)

臣の子の 八重の紐解く 一重だに いまだ解かねば 御子の紐解く 其の二 (一一二七)

赤駒の い行き憚る 真葛原 何の伝言 直にし良けむ 其の三 (一一二八)

といふ。

天智天皇が崩御し、殯宮儀礼が行われた際に詠われた三首の「童謡」である。一一二六番歌謡では「鳥傍」でも快適に過ぐす吉野川の「鮎」と「水葱」「芹」の下で苦しむ「吾」とが歌われる。一一二七番歌謡は「臣の子」「御子」の紐を解くことを歌い、一一二八番歌謡は「真葛原」で「伝言」を受け直接会いたかった思いが歌われている。この三首の「童謡」は、十八番歌謡とは異なり、歌を説明する物語を持たないため、さまざまに解釈がなされている。早くに『厚顔抄』が「此八大友皇子ノ山中ニ入テ自縊タマフヘキ意ナトニヤ」として以来、壬申の乱と関連させた解釈が多く行われてきた。一一二六番歌謡の「吾」を大友皇子とし、「吉野の鮎」であれば川の島にも住めるが、「吾」は「水葱」「芹」の下では苦しいのだ、と吉野に籠り壬申の乱に勝利する大海人皇子と敗北する大友皇子とが対比されていると理解するものが多い。だが、歌謡を導く地の文との関りを重要視するならば、後に起こる壬申の乱に結びつけるのは早計であるとの青木周平の解釈もある。青木は、小島憲之の「天皇の新喪そのものの諷刺とすれば挽歌に近いものともみられる」という指摘を受け、三首を「女性、おそらく天皇に仕える女官の歌」とした⁽²²⁾。日本書紀における「童謡」で後の物語において歌の解釈がなされないのは、斉明六年の一二二番歌謡、天智九年の一二四番歌謡、天智十年の一二五番歌謡であるが、いずれもそれぞれ、百済救援軍

の敗北、法隆寺の焼失、渡来人への叙爵という出来事の直後に「童謡」が記されている。青木が指摘するようにこの一二六〜一二八番歌謡も天智天皇の崩御を受けて記された、事件直後の鎮魂を意図した「童謡」とみるべき蓋然性は高い。壬申の乱に関連づけたとしても天皇崩御に導かれた「童謡」と理解しても、拠点となった地である「吉野」が大海人皇子の暗示となっていることは変わらない。

日本書紀の「童謡」は、日本書紀の問題として別に考える必要があるが、「童謡」と記された天智天皇崩御に関する一二六番歌謡に詠まれる「吉野の鮎」には、すでに吉野入りが描かれている大海人皇子の存在の寓意があること、「童謡」の記載がない十八番歌謡は、未来を「知ら」ずに過ごす（現状）を描く構造を持つ悲劇を暗示する歌であるということである。

五 卷十三と記紀の世界

万葉集の三三三九番歌は、「近江の海」の情景を詠んだ歌である。「近江の海」という都から離れた地において、都の冬の情景として馴染み深い「いかるが」と「ひめ」たちが遊ぶ姿を見て発想された歌である。都の冬を象徴する「いかるが」と「ひめ」とは、今後起きるであろう事件を知らずに遊ぶ。雄大な「近江の海」の岬ごとに初夏に咲く「橘」の花に彩られた枝に、囀として仕掛けられた冬鳥の「いかるが」と「ひめ」とが無邪気に遊ぶ様子が、母父が捕らえられてしまうという今後の事件の哀れさを強く印象づける。日本書紀歌謡と同じく未来を「知ら」ずに過ごす（現状）が対比的に描かれる構造を持つ以上、三三三九番歌は、何らかの寓意をもつ歌である。だが、歌が詠まれた時点で込められた寓意は、判然とはしない。

『釈注』は、元来は「童謡」（何を寓したかは不明）であったが、卷十三の「雑歌」としては「近江を旅した人がその地

方の珍しい風俗に感銘して詠んだ歌」と理解されていたとするが、卷十三の理解として正しいのだろうか。記紀とのつながりを意識させる歌が卷十三に多く収載されたことを踏まえると、『釈注』のように、卷十三の歌として記紀とのつながりを想起できなかったとは言えないのではないだろうか。以下に、卷十三の歌と記紀の世界のつながりを整理しておく。

○雑歌 二七首 三三二一～三三二四七

三三二七～三三二九 — 「葦原の瑞穂の国」天孫降臨

三三二二 — 「泳の宮」景行紀

三三四七 — 「沼名川」天の真名井神話

○相聞 五七首 三二四八～三三〇四

三二六三左注「古事記を検するに曰く、「件の歌は、木梨之輕太子のみづからまかりし時につくる」といへり」

反歌三二六四・或書反歌三二六五 — 古事記九十番歌謡

○問答 十八首 三三〇五～三三二二

三三二一〇～三三二一三 — 古事記二番歌謡・日本書紀九六番歌謡

○譬喩歌 一首 三三二二三

○挽歌 二四首 三三二四～三三四七

三三三一 — 日本書紀七七番歌謡

卷十三「雑歌」においては二七首中、当該の三三二九番歌を含め四作品が記紀の世界とのつながりを認めうる。作品ごとの個別の検討が必要ではあるが、卷十三の歌が記紀の世界の影響を受けているのは間違いないだろう。²³⁾ 記紀の世界との

つながりをもつ歌がこれほど多く収載されているのは、偶然とは考え難く、卷十三の特質と深くかわつていると見るのが自然である。卷十三の編者は記紀とのつながりを意識していたのではないだろうか。記紀の世界とのつながりは、卷十三の歌に歌謡の形式をもつものが多いこととも無縁ではない。

伊藤博は、卷十三を「宮廷歌謡集、いわば宮廷社会のさまざまな機会における歌の台本」「宮廷歌人に影響を与えると同時に、宮廷歌人の作の伝誦されたものなど宮廷の新しい歌謡をも吸収してあつた宮廷歌謡集」と述べる。²³ 早くに『万葉考』が卷十三を卷一二に続く「古撰の巻」と指摘し、伊藤論も古くからある「宮廷歌謡集」として卷十三を位置づけた。だが、卷十三の歌を古層とのみ捉えることの限界は、長反歌の形式などから批判が加えられている。太田善磨が「歌という文芸形態の可能性をたしかめ、新様式の開拓をさえ企図したきわめて注目すべき遺品」²⁴、遠藤宏が「万葉後期の文学的営為」「（人麻呂以降の―筆者注）新しい方向性への模索」²⁵、上野誠が「古い時代につくられたように装われた作品」として批判するように、卷十三は、記紀の物語という宮廷とのつながりが深いものではあるが、新たに創作された歌を収載した巻と考えられる。卷十三の特質とは、五味義保が指摘するように「作者の名を得ず説話の中心たる一人物に結び付き得なかつた歌謡」であるということだ。²⁶ 卷十三は、古歌謡の形式を踏まえながら、新たに創作された、記紀の世界との接近を果たす歌が集められた巻なのである。

当該の三三三九番歌は「近江の海」を訪れた都人による旅の歌の発想をもつた歌である。岬ごとに咲く「花橘」に彩られた「近江の海」には、母父を捕えるための囿として仕掛けられた「いかるが」と「ひめ」とが戯れている。旅の歌の発想によって雄大で美しい「近江の海」の情景を詠うが、今後起きるであろう不吉な事件を暗示する歌でもある。眼前に広がる美しい「近江の海」の初夏の情景は「花橘」の「上枝」「中つ枝」「下枝」の細部によって描き出される。

上中下の枝の描写は、古事記の雄略天皇条の三重の采女の歌謡（九九）にもみられる。三重の采女は、杯に楓の葉が落ちたことに気がつかず雄略天皇に捧げ、天皇は激怒し三重の采女を斬ろうとした。そこで采女は、天皇の治世を讚美する

歌を歌う。「……百足ももだる 楓つぎが枝えは 上かみつ枝えは 天あめを覆おへり 中なかつ枝えは 東あづまを覆おへり 下した枝えは 鄙ひなを覆おへり……」と、杯に落ちた楓の上段中段下段の枝が、それぞれ天・東・鄙を覆うように、天皇の治世も天上・地上のすべてに届いていることを歌ったのである。上中下の枝の広がり、広大な空間イメージを喚起し、讚美表現として機能している。

三三三九番歌においても、記紀歌謡の伝統的な讚美的型によって、美しい「近江の海」の情景を詠み、悲劇を語る型によって、今後の成りゆきを暗示するのである。

また、三三三九番歌の不吉な事件の内実は「近江の海」という点だけでは、断言できない。ただ、編纂された卷十三においては、記紀の世界とのつながりが強く意識され、そのため「近江の海」で起きる事件として、壬申の乱によって滅ぼされる近江を拠点とした大友皇子の物語が浮かびあがってしまうのである。

おわりに

卷十三に収載された三三三九番歌は、「近江の海」の情景を詠いながら今後の不吉な事件を暗示する、記紀歌謡の様式をもつ歌である。琵琶湖畔を訪れた都人にとって馴染みの冬鳥「いかるが」と「ひめ」とが遊ぶ様子は、事件の悲劇的な結末を予想させる。その歌が記紀の世界とのつながりの強い卷十三に位置づけられることによって、美しく雄大な「近江の海」に遊ぶ鳥たちの無邪気な様子は、史実とは逆の大海人皇子の子どもたちの危機を暗示する。それがかえって、近江を拠点とし滅ぼされていった大友皇子と大海人皇子との、壬申の乱という歴史的な悲劇を印象づけることになるのである。

注

(1) 万葉集の引用は『新編日本古典文学全集』による。

(2) 上野理担当「たちはな」(稲岡耕二編『万葉集事典』別冊国文学四六、学燈社、一九九三年八月)

(3) 寺川真知夫『万葉集』の橘—その表現の展開(『同志社女子大学日本語日本文学』七、一九九五年十月)

(4) 「ほととぎす」とともに詠まれた例・卷十・一九五〇、一九五四―作者未詳、卷八・一四八一・一四八六・一五〇九、卷十八・四一〇一、卷十九・四一六九・四一七二・四一八〇―大伴家持

「五月」とともに詠まれた例・卷八・一五〇二―坂上郎女、卷八・一五〇四―高安、卷十八・四一〇一、卷十九・四一六九―大伴家持

(5) 「橘」の「花」を詠む歌もあるが、コミカンの「橘」と思われる歌も含まれる。本論では考察の対象を「花橘」に限る。

(6) 「花橘」を「(玉に)貫く」例・卷三・四二三 山前玉、卷八・一四七八、卷十・一九六七―作者未詳、卷八・一五〇二―坂上郎女、卷十七・三九八四、卷十九・四一〇一・四一〇二・四一六六・四一八〇―大伴家持

「鏡なす 我が見し君を 阿婆の野の 花橘の 玉に拾ひつ」(卷七・一四〇四 作者未詳・挽歌)もある。亡くなった人の骨を「花橘」で作る「玉」として拾うことが歌われ「玉に貫く」という表現を受けてのものと考えられる。

(7) 小野寺静子「薬玉考」(『札幌大学女子短期大学部紀要』二九、一九九七年三月)

(8) 「花橘」が「散る」「落ちる」例・卷八・一五〇二―坂上郎女、卷八・一四八六、一五〇九―大伴家持、卷九・一七五五―高橋虫麻呂、卷十・一九五〇、一九五四、一九六六、一九七一―作者未詳、卷十四・三七七九―東歌

(9) 「我こそば憎くもあらめ我がやどの花橘を見には来じとや」(卷十・一九九〇)は、「花橘」を見に来ないつもりなのかとつれない相手をなじるような歌である。「花橘」を「見る」ことが歌われており、ここでも「花」が咲いていることが予想される。

「小里なる花橘を引き攀ちて折らむとすれどら若みこそ」(卷十四・三五七四 防人歌)は、若い「花橘」を手折ることを躊躇する譬喩歌である。「花橘」は美しくうら若き女性の譬えだが、「花橘」を手折るのは「……あやめぐさ 花橘に 貫き交

じへ 縋にせよと……」(卷十八・四一〇二)とあるように「縋」にするためと考えられる。四一〇一―番歌で歌われる、あやめ草や花橘に真珠を混せて緒に通した「縋」には、「花橘」の花弁あるいは花房が用いられる。三五七四番歌もまた「縋」として

髪に飾るため手折られた、花咲く「花橘」と言える。
「鶉鳴く古しと人は思へれど花橘のにはほふこのやど」(卷十七・三九二〇)は、家持が平城の旧宅に独りである時に詠んだ

六首の五首目にあたる。人は寂れたと思う平城だがこの旧宅には「花橋」が「にほふ」ほどだと歌うこの歌は、安積皇子が急逝してほどなく詠まれた。古びた旧宅にやり切れない思いを独り抱えている家持だが、眼には美しい「花橋」が映る。一首目（三九一六）で「橋」の「匂へる香」が「雨」で消えてしまわないか、二首目で「花は過ぐ」と「橋」の散ったことが歌われており、三九二〇番歌の「にほふ」は、かぐわしい「香」も「花」の美しいさまの両方を意味していると考えられる。

- (10) 類聚歌林が引用した「二書」とは「伊予国風土記」と考えられ、以下の類似の記事が掲載されている。なお、引用は『新編日本古典文学全集』による。

岡本の天皇と皇后との二軀を以ちて、一度とす。時に大殿戸に樞と臣の木とあり。その木に鴈と此米との鳥と集き止まれり。天皇、この鳥が為に枝に稻穂どもを繋けて養ひ賜ふ。後の岡本の天皇と近江の天津の宮に御宇ひし天皇、また淨御原の宮に御宇ひし天皇の三軀を以ちて一度とす。こを幸行五度と謂ふ。

- (11) 壬申の乱と関連した寓意説を採るものとして、野雁『新考』（大友皇子の御うへを神の論したまへる童謡等にて水垣宮御世なるに同じきにや）、『総釈』（中山巖水説を引用）、佐佐木『評釈』（『古義』の中山巖水説を挙げ「二鳥を直ちに二皇子によそへたといひがたいとも思ふが、採るべき説である）、『大系』（『斉明紀や天智紀に見えるような諷諭の童謡の一種ともいう。近江の海と歌い出しているのを、近江朝廷に関する諷刺の意ともとれる）、『注釈』（中山巖水説引用）、『新編』（崇神紀十八番歌謡、壬申の乱の直前の諷諭説に言及）

- (12) 寓意の内実を明らかにしないものとして、井上『新考』（寓意ある歌とおぼゆ）、『全歌講義』、『全解』がある。なお『集成』は「旅先の珍しい風俗を詠んだ歌か。諷諭を含んだ童謡ともいう」と、寓意か否かの判断を保留している。

- (13) 本居宣長「万葉集十三之巻疑問」は「本居宣長の万葉集卷十三歌考」野井安定の「万葉集疑問」に答える——（『論集上代文学』二四、笠間書院、二〇〇一年六月）による。

- (14) 日本書紀の引用は『新編日本古典文学全集』による。

- (15) 古事記の崇神天皇条にも以下のような、類似の物語と歌謡が記されている。古事記の引用は『新編日本古典文学全集』による。
故、大毘古命、高志国に罷り往きし時に、腰裳を服たる少女、山代の幣羅坂に立ちて、歌ひて曰はく、
御真木入日子はや 御真木入日子はや 己が緒を 盗み殺せむと 後つ戸よ 行き違ひ 前つ戸よ 行き違ひ 窺

はく 知らにと 御真木入日子はや

(一一二)

是に、大毘古命、怪しと思ひて、馬を返し、其の少女を問ひて曰ひしく、「汝が謂へる言は、何の言ぞ」といひき。爾くして、少女が答へて曰はく、「吾は言ふこと勿し。唯に歌を詠はむと為つらくのみ」といひて、即ち其の所知も見えずして、忽ちに失せにき。

故、大毘古命、更に還り参る上りて、天皇に請しし時に、天皇の答へて詔く、「此は、山代国に在る我が庶兄建波迹安王の、邪しき心を起せる表と為らくのみ。伯父、軍を興して行くべし」とのりたまひて、即ち丸邇臣が祖、日子国夫玖命を副へて遣しし時に、即ち丸邇坂に忌瓮を居多て、罷り往きき。

日本書紀との相違は、崇神天皇が歌謡の意味を判断している、歌謡の歌詞が長い、「御真木入日子はや」が繰り返される、タケハニヤスの謀反を歌謡が直接的に示しているという点などが挙げられる。古事記では「御真木入日子はや」が繰り返され、命が狙われていることを垂仁天皇に直接的に訴える歌謡であり、万葉集の三三三九番歌とは日本書紀の十八番歌謡の方がより近い。本論では、日本書紀の歌謡によって三三三九番歌の寓意性について考察していく。

(16) 「童謡」の諸説に関しては、関口一十三「童謡」研究史」（『古代歌謡とはなにか 読むための方法論』笠間書院、二〇一五年二月）に詳しく整理されている。

(17) 土橋寛『古代歌謡全注釈』日本書紀編（角川書店、一九七六年八月）

(18) 『童蒙抄』が「そばひ、そばへる杯云事は、ざれわざをして戯れて遊ぶ有様を云。今も俗間に人そばへをする杯云事あり」とし、「略解」は、枕草子三九段の「そばへたる小舎人わらは」を引用する。だが、四段活用となり、下二段活用の三三三九番歌の例とは合わない。松岡静雄「論究」は「ソバヒはソヒ（副）の進行格で、並び居るといふほどの意」とする。いずれの意でとても「いかるが」「ひめ」とが心を通じ合わせて過ごしていることとなる。

(19) 「吾」を大友皇子とするのは『厚原抄』『槻の落葉』『稜威言別』『新解』『全講』『記紀歌謡評釈』、大海人皇子とするのは高木市之助（『吉野の鮎』岩波書店一九四一年九月）、『古代歌謡全注釈』は「水田の中を這い廻る農民」、「皇子でありながら農民と異なるところのない吉野での皇子の苦しみ」とする。大友皇子とする説においても「吉野の鮎」の理解や詠み手の立場については、一致していない。

- (20) 青木周平「天智紀③」(126～128) 大久間喜二郎・居駒永幸編『日本書紀(歌)全注釈』(笠間書院、二〇〇八年四月)
- (21) 小島憲之「上代歌謡をめぐる中国文学との交渉」(『上代日本文学与中国文学 上』塙書房、一九六二年九月)
- (22) 青木は三首を、注(20) 同書において「126歌は、大海人皇子の吉野入りを踏まえつつ、仕えていた女官が天智の死に対する苦しみをよんだ歌。127歌は、五大臣の誓盟による結束を「臣の子の八重の紐」に喩え、近江方より大海人皇子側についたことを「御子の紐解く」とよんだ女官の歌。128歌は、天智の死を知らせる「伝言」を、大友皇子が直接会いに来てくれたらいいのに、と女官の立場でよんだ歌」とする。
- (23) 景行紀「泳の宮」との関連をもつ三二四二番歌については、「泳の宮」の伝承歌―万葉集卷十三と記紀の世界』(『古代歌謡とはなにか 読むための方法論』笠間書院、二〇一五年一月)で論じたことがある。
- (24) 伊藤博「宮廷歌謡の一形式」(『国語国文』一九六〇年三月)後に『万葉集の構造と成立』上(塙書房、一九七四年一月)所収。
- (25) 太田善磨「万葉集卷十三の含む機制」(『古代日本文学思潮論』IV、桜楓社、一九六六年五月)
- (26) 遠藤宏「万葉集卷十三長歌考―万葉後期の成立と思われるものについて―」(『論集上代文学』六、笠間書院、一九七六年三月)後に「長歌考―万葉後期の成立と思われるものについて―」(『古代和歌の基層』笠間書院、一九九一年一月)所収。また同書「万葉集卷十三論」に氏の卷十三全体に及ぶ論が収載されている。加えて、「作者未詳の宮廷歌―卷十三の世界―」(高岡市歴史館論集六『無名の万葉集』二〇〇五年一月)もある。
- (27) 上野誠「万葉史における卷第十三―擬古の文芸として位置づける」(『万葉史を問う』美夫君志会編、一九九八年二月)
- (28) 五味義保「万葉集卷十三考」(『国語国文の研究』二二、一九二八年六月)後に『日本文学研究資料叢書 万葉集Ⅱ』(有精堂、一九七〇年六月)所収。